大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金　報告書
Outcome report

計画名 Plan	UAE のエコ・モスクとムスリムの環境観に関する調査
氏名 Name	中鉢夏輝
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	アジア・アフリカ地域研究研究科 グローバル地域研究専攻 2 年
渡航国 Country	アラブ首長国連邦（UAE）
渡航日程 Travel schedule	2023 年 2 月 2 日　　～　2023 年 2 月 14 日

・ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
・写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
・各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
・日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

◇研究背景

昨今の地球環境問題は、イスラームにまつわる儀礼や法、空間に変化を与えている。世界各地で、ムスリムの宗教実践が環境に配慮したかたちで行われ始めている。「エコ・モスク」もその変化の一例である。モスク（アラビア語でマスジド - masjid）は、ムスリムが 1 日 5 回の礼拝をするための場所として知られる。ここで、エコ・モスクやグリーン・モスクの名を冠しながら、資源消費を抑えたり緑地を増やしたり、といった取り組みが行われているのである。

気候変動や環境問題に懐疑的な者にとって、こうした環境配慮の傾向は一過性の流行や欺瞞にしか見えないかもしれない。もちろん、気候変動が本当に起きているか否か、もし起きているとしたら、実際に生物圏と人間社会にどのような影響を与えているのか批判的に分析する必要がある。とはいえ、それを差し置いても、UAE を始めとするイスラーム世界においても、自然環境に配慮した様々な取り組みが次々と生まれ、ムスリムの社会・思想にも影響が出ているのは、紛れもない事実である。そして、この事実は、イスラームについての議論に「自然」という要素を加えて論じ返す余地が多分にあるということを意味する。

◇先行研究と研究課題

ムスリムはイスラームと環境をどのように結び付けているか、この問いに関する先行研究は、環境運動における動員資源としてイスラームが機能していること、イスラーム環境法やイスラーム・グリーン・ファイナンスのような新しい制度の成り立ちを解明してきた。そして、これらの理論的・道徳的な下支えとなるのが、クルアーンやハディースを基にした「イスラーム環境倫理」であることを論じてきた。

ムスリムの環境観は多様性を持っている。しかし、研究の理論的側面だけでは、実際の現場でイスラーム環境倫理がどのように適用されているのか、不明である。また、社会運動論や民族誌のみでは「主体 X にとって、イスラーム、およびその影響は、このようなものである」と固定的な理解に留まる。なお、環境配慮型モスクに関する研究は、デザインや資源消費量など建築学的側面の知見に留まる。地球環境問題におけるイスラームの役割を考えるうえでは、地域研究的想像力を働かせる必要がある。UAE の歴史的・地理的条件のなかで、モスクがどのように建築・利用されているのか、そして、その建築実践・宗教実践のなかでイスラームがどのように機能しているのか、これらの関連を拾い集める必要がある。

◇研究・渡航の目的

上記背景を踏まえて、筆者は「イスラームと環境」についての研究に取り組んでいる。本研究は、ムスリムがどのように環境と信仰を結び付けて、イスラーム的な環境観を形成しているのか、その関係を明らかにすることを目的とする。刻一刻と変化する環境に対して、UAE の人々はどのような環境観を持っているのか、そしてそのイスラーム的な見方とはどのようなものだろうか。これについて考えるうえで、モスクは注目に値する。モスクは、水道や電気、スピーカーといったインフラとの関わり、環境をめぐる法律や経済など制度との関わり、人々の信仰や生き方に関する道徳性といった様々なものごとが絡み合う空間である。エコロジー、すなわち生態学的環境に配慮したエコ・モスクは、そうしたモスクを構築するインフラ、制度、道徳といったものごとが改変された産物であり、改変していくプロセスにある空間である。

UAE では「グリーン・モスク」という名のプロジェクトが 2010 年に行われたのち、2014 年にドバイに「中東地域で初」と謳われる環境配慮型モスクが建設された。これ以降建設されたモスクでも環境配慮技術の導入は拡大しており、これまでのモスクのデザインとは異なっている。イスラーム世界のなかでも UAE は、今後のモスクのあり方、そしてこれらを規定するイスラ—ム的環境観を論じるうえで欠かせない「先進事例」と言える。

本渡航では、UAE においてムスリムがどのように環境と信仰を結び付けて、イスラーム的な環境観を形成しているのか、その関係を明らかにするため、UAE 現地でデータ収集を行った。具体的には、以下の調査を実施した。

① エコ・モスクがどのように建てられ、どのように利用されているのか、その実態を知るための現地参与観察
② 運営者によるエコ・モスクに関する説明のなかで、どのようにイスラームが論じられるか、位置づけ知るためのインタビュー調査
③ エコ・モスク以外の環境実践のなかで、どのようにイスラームが論じられるか、位置づけを知るためのインタビュー調査
④ イスラーム的環境観を構成する重要概念に関する文献調査

渡航スケジュールに関して、2 月 2 日に関西空港を出発し、3 日にドバイに到着、以降 13 日までドバイのホテルに滞在した。13 日深夜にドバイ国際空港を出発し、14 日に帰国した。

成果 Outcome

◇UAE について

調査対象地であるアラブ首長国連邦（以下 UAE）は、産油国として、あるいは金融・観光の中心地として知られる、7 つの首長国からなる連邦制国家である。他方で、UAE は近年国内の自然環境保護に力を入れるほか、グリーン・エネルギー、グリーン・ファイナンス拠点としての世界的地位を確立しつつあり、23 年 11-12 月開催予定の国連環境サミット COP28 の主催国にも決定している。UAE 国民のほぼ全員がムスリムであり、UAE 国内に住む移民の多くも、南アジア、アラブ諸国、アフリカ出身のムスリムであり、UAE 社会とイスラームの関係は密接である。今日の UAE 社会でも「脱炭素」や「サステナビリティ」が声高に叫ばれており、これに関する説明や活動にイスラームの教義が関係するケースが散見される。

筆者はこの UAE に 11 日間滞在するなかで、脱炭素やサステナビリティが叫ばれることで、ムスリム社会の側も変化している、という様子を感覚的に把握した。例えば、モスクのデザインに関して、エコ・モスクを称さずとも、資源消費を抑え、装飾も控えめな落ち着いたデザインのモスクが徐々に増えてきている。これまでの壮麗な見た目のモスクとは一線を画すものである。今後、モスクをはじめとした建築や環境デザインを捉えるうえで、UAE ないしムスリム特有の美的感覚の変化に鋭敏になっておくことは、今後の研究でも必須であると強く感じた。

◇調査成果

① エコ・モスクの運用・利用実態についての参与観察

ドバイのデイラ地区にあるＫモスクにて参与観察を行った。Ｋモスクの実測図は、ウェブサイト Al-Fozan＜https://mosqpedia.org/en/mosque/135＞に掲載されている。本調査において、モスクの外形（実測図・立面図）からは知りえない情報が得られた。具体的には、導入技術、美術的装飾（アラビア書道やモチーフなど）、運営組織・利用者の属性、運営スケジュール、運営関係企業など、である。

モスクの入り口横には、本モスクが米国グリーン・ビルディング協会の LEEDS 認証を受けた「グリーン・モスク」であると黒地に黄色で書かれた広告版が掲示されている。しかし、モスクが「グリーン」か否かを意識する一般利用者は少数である。そのため、「イスラームが人々の道徳心に作用して、環境配慮行動を促す」といったシナリオは想定が難しい。そのため、ムスリムの環境観に作用するイスラームを捉えるためには、より巨視的な視点を設けるか、モスク以外の対象を見る必要があるだろう。他方、ムスリムは、モスクでの振る舞いや資源の使い方（例えばお清めに使った水を再利用しても良いか否か）について、いざ質問すると、議論が分かれるところだった。人々のイスラーム的環境観の捉え方の難しさと奥深さを改めて実感した次第である。

② エコ・モスクに関する説明のなかで語られるイスラームに関するインタビュー調査

Ｋモスクのイマーム（指導者を意味する）に半構造化インタビュー調査を実施した。イマームは UAE 生まれのパキスタン系男性で、宗務・ワクフ総局（AWQAF）からのイマーム職募集に申請し、採用され、本モスクに配属された。インタビューでは、イマーム自身のライフ・ヒストリーを聞いたうえで、なぜ太陽光パネルを設置するのか、なぜ節水をして水保全に努めるのか、なぜ浪費が悪いことなのか、クルアーンに書かれた教義に照らし合わせながら、資源についての説明を聞くことができた。また、Ｋモスクの清掃員との対話型インタビューは、イマームとのインタビューとは異なる知見が得られて充実したものとなった。

③ 環境実践におけるイスラームの機能を知るための参与観察・インタビュー調査

「グリーン・シェイフ」（Green Sheikh）の通称で環境保護活動に取り組む、アブドゥル・アズィーズ・ビン・アリー・ヌアイミー氏が講演を行うワークショップに参加後、対面インタビューを実施した。アブドゥル・アズィーズ氏は 7 つの首長国のうちの 1 つであるアジュマンを統治するヌアイミー首長の甥である。彼は、アジュマン政府の環境アドバイザーを務める一方で、「グリーン・シェイフ・アカデミー」を UAE 国内外で主催している。アブドゥル・アズィーズ氏は、前述の 2011 年に行われた「グリーン・モスク」プロジェクトに携わっている。また、同氏は英語、アラビア語で著書を複数刊行しており、そのなかで、クルアーンやハディースに書かれた概念を敷衍して説明する記述が散見される。

なお、ワークショップのなかでは「サステナビリティとは何か」を５歳児に説明するための絵を描く、といった企画があった。これに参加していた筆者は、一般参加者の素朴な環境観を知ることができた。山々や水、太陽の絵を描くなかに、神の存在を明示する者、ほのめかす者、全く登場させない者などがいた。人々の環境観や環境実践のなかに潜む精神的な要素（信仰心や怖れなど）を引き出すための手法を、ワークショップやインタビューを通じて僅かながらも学べた点は、今後の調査の強みになるであろう。

④ イスラーム的環境観を構成する重要概念に関する文献調査

エコ・モスクに関する報道や論文は水とエネルギー消費に注目する傾向にある。イスラーム世界のなかで、水に関するイスラーム法に基づく議論は、預言者ムハンマドの時代から長きにわたり行われてきた。また、近年はエネルギー利用についても、イスラーム法の観点から議論

がなされている。それにも関わらず、これらの議論が、UAE における実際の環境政策、およびムスリムたちの環境実践とどのような共通点や相違点を持つのか、また制度上の影響関係は存在するのか、さらにそれらが時代に応じてどのように変化してきたのか、といった疑問を射程に入れた研究は十分に行われていない。これらの疑問に答えるため、まずはその議論を追うことができる文献資料を整理・収集する必要があった。

そのため、ドバイに新設されたムハンマド・ビン・ラーシド図書館（MBR 図書館）をはじめとする諸図書館のほか、ドバイやシャルジャ（イスラーム色の強い首長国として知られ、イスラーム関連書籍が集まる本屋通りがある）の書店にて文献調査を行った。「イスラームと環境」やエネルギーをテーマにした雑誌や書籍は、MBR 図書館が充実していた。また、水や土地利用については、現代の環境問題の文脈で語ろうとすると内容が理工系寄りになる。しかし、そうした本でも、読み進めるとイスラームに言及することがあるので、注意が必要であった。他方、法制度についてはイスラーム法の観点から論じた文献の蓄積があることが確認できた。

今後の展望 Prospects for the future

以上、本報告書では「イスラームと環境」についての先行研究に残された課題点について概観したうえで、渡航を通じて得られたデータについて、特に筆者自身が得た「気づき」を踏まえながら、記してきた。この気づきは、現地フィールドワークだからこそ得られる賜物である。したがって、本報告書ではこの気づきに焦点を当てている。今後、学会発表や投稿論文のなかでデータと気づきを整理しながら、本渡航の成果を学術的な成果物として還元していきたい。

本渡航で得た気づきのなかで、今後の研究の根幹に関わるものが一点ある。UAE をはじめとするイスラーム世界では、人々の環境配慮行動への動機づけを考えるうえで、イスラームの役割を理解することは欠かせない。ただし、その際に重要なのが、物質的条件である。イスラームが人々の環境観に作用する一方で、水や電気、それをつなぐインフラ、それらにまつわる制度、様々な要因がイスラームに作用している。「自然」という要素の重要性がこれまでにないほど高まる今日、非人間的な「もの」が規定要因としてイスラームにも関わっているのである。

写真１．金曜日のＫモスク（報告者撮影）
金曜日の正午は主礼拝堂、副礼拝堂ともに満杯となり、外で礼拝する者も多い。

写真２．Ｋモスク主礼拝堂天井（報告者撮影）
『クルアーン』光章 35 節が書かれている。この節では、すべての存在を創造した神（アッラー）がガラスの光に例えられている。

写真３．Ｋモスク外庭（報告者撮影）
モスクのトイレ、ウドゥー場（お浄め場）から出た排水は処理され、栽培に利用される。